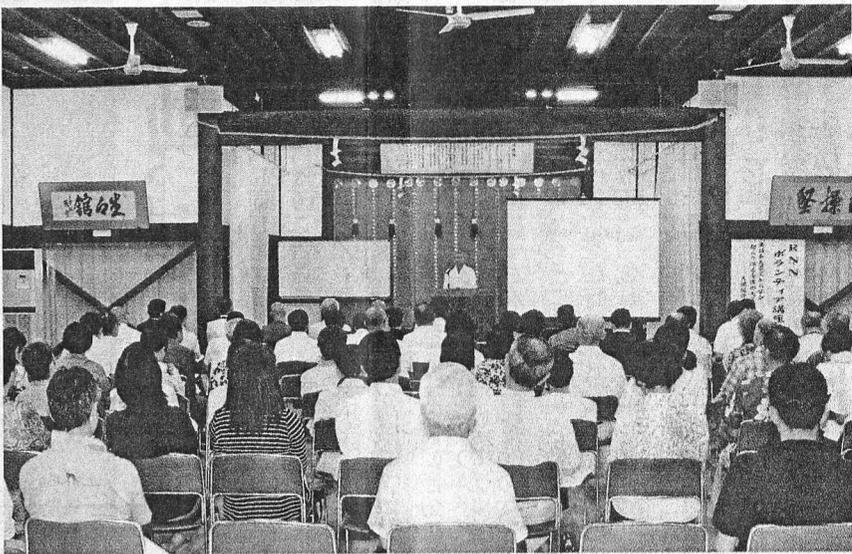


岩手の大槌稻荷神社禰宜・十王館さん

放した禰宜・十王館勲さん(51)が、岡山市内で講演した。被災者を受け入れた経験を踏まえ、災害時の対応や心構えについて語った。(杉本明信)

「津波が来る」。その直感した。地元には「揺れたら高台に逃げろ」との言い伝えがある。すぐに大勢の人々が避難してくるだろうと思った。

神社は高台にあり、海に近い町を一望できる。慌てて外に出た直後、息子が「あーっ」と叫び、海を指さした。津波がごう音と土煙を上げ、家々をのみ込みながら迫ってきた。まるで(映画やテレビの)スローモーション映像のようだった。境内に着の身着のまま避難してきた人たちが次々に集まってきた。波にさらわれた町と真つ黒な海を、涙も拭かず、ただぼうぜんで見つめていた。「いつま



震災後の状況や、災害への心構えなどについて学ぶ参加者

避難所にいると、普段の生活と違ってやることがなく、その結果無気力になる人もいる。それを防ぐのが狙いだった。

教訓生かして

避難してきた人たちを飢えさせず、寒さから守ってこられたのは祖父母のおかげだと思っている。

「神社は300年続く避難所」「この辺りは、何十年かに1度は津波に襲われている」。幼少期から、いつもこう聞かされ育った。言葉にこそはなかった。東北地方は、歴史的に津波に何度も襲われている。だから、いつか大津波はやってくるんだという意識をずっと持ち、万一の備えを怠らなかった。

大槌町で人々を救えた教訓を、岡山の人にも生かし

避難所生活

この日から1000人を超える人たちの共同生活

祖父母の言葉 津波に備え

でも、そこにいたら風邪を出そうになる。2011年3月11日午後2時46分。「ゴー」という聞いたこともない大きな地鳴りとともに、突然地面が激しく揺れ始めた。家の食器棚のコツ

でも、そこにいたら風邪を出そうになる。2011年3月11日午後2時46分。「ゴー」という聞いたこともない大きな地鳴りとともに、突然地面が激しく揺れ始めた。家の食器棚のコツ

が始まった。家族や知人の安否が分からず一刻も

に行かねばならなかった。津波による土砂が行く手を阻んだ。避難してきた男性たちに頼み、拾ってきた一斗缶や鉄板をスコップ代わりに、みんなで力を合わせて道を造った。

震災翌日には、私と役場職員、町内会代表の3人が避難所長になり、避難所の運営が始まった。高齢者や子どもらを除き、いろんな役割を担ってもらった。灯



早く捜したいの思い、心の支えや生活の場を奪われた喪失感…。

「何をやるにも、まず自分たちが生きねば」。震災の夜、みんなに呼び掛けた。亡くなった祖父母らの言葉に従い、食料

7月25日、宗忠神社(岡山市北区上中野)で開かれたRNN(人道援助宗教NGOネットワーク)主催の講演会の要旨。



じゅうおつだて・いさお 1961年1月生まれ。21歳の時から大槌稻荷神社の禰宜を務める。2011年の東日本大震災の際には神社を避難所として約5カ月開放した。